

## 研究授業「保育内容一言葉」の実施

井 上 範 子

### Enforcement and reflection of an open class “The contents of childcare-Language”

Noriko Inoue

#### Abstract

This paper is a record of a class entitled “The Contents of Childcare-Language,” done as a part of a “Series of classes open for observation by the outside instructors as conducted by the Department of Early Childhood Care and Education faculty.” This research was sponsored by special funds for promoting higher education, and support funds for improving educational and learning methods for the 2004 fiscal year. This series started in the previous year when regular instructors in the Department of Early Childhood Care and Education began taking turns teaching open classes. Instructors from other departments, as well as faculty members from Takamatsu University, were invited to join this open class. I contend that this made the class more significant, due to the active discussion and constructive opinions on teaching methodology offered in the meeting reviewing the class. It also helped solidify bonds between faculty members.

本稿は、平成15年度から本学保育学科が実施している授業改善のための事業「保育学科における教員の授業研究の実施」（大学教育高度化推進特別経費 平成16年 教育・学習方法等改善支援経費）の一環として行われた「保育内容一言葉」の研究授業の記録である。

本学科の研究授業は昨年専任教員により順次実施されており、今回も他学科の教員だけでなく併設する大学の教員に対しても公開する研究授業であるため教員間の連携や教育法についての研究・協議がなされ意義深いものと確信している。

#### 1 研究授業の日程

研究授業および検討会は次の日程で行われた。

〈研究授業〉

日 時：2004年12月21日（火）4校時 14時40分～16時10分

場 所：A31号教室

授業科目：保育内容一言葉（担当：井上範子）

参 加 者：他学科・大学教員を含めて 10名

〈検 討 会〉

日 時：2004年12月21日（火）16時20分～18時10分

場 所：保育演習室（A館2F）

参 加 者：他学部の教員を含めて 7名

この研究授業および検討会は、今まで行われてきたものと同様に特別設定された時間ではなく、平常の授業時間内での実施であるため参加者はおのずと限られてくるのは致し方のない面がある。それにしても、保育とは関係のない大学の教員（経営学部）にも参加していただけたことは本学の目指す「教育・学習方法等の改善」事業に関心を持ち何らかの形で改善しようと努力していることの現れであると思われる。

## 2 本講義の目標と授業の進め方について

本講義は、時間割の都合や諸般の事情により、2年次後期に開講されているため教育実習が終わってからの授業となっている。したがって演習形式をとるよりも実践のあとのまとめ的な現場をイメージしながら理論を構築できたらと思い取り組んでいる。

言葉の獲得は、乳幼児期の発達課題の一つとして重要なものであることの認識を十分に持ち、日々の保育活動の中で言葉をどのようにとらえ、子どもとどう関わるのか言葉を媒体としての日常生活のあり方を探求する。また、自分自身の言語感覚を磨き、保育者として他人に優しい品格のある言葉使いができるよう努力する習慣を養うことを目標としている。

こうしたことから担当者自身、美しい日本語を話すことができないので、自戒の意味を込め、少しでもほっとするような言葉使いができればと願っている。しかし、いまだ目標は達成できず現在進行形で学生とともに努力を重ねたいと思っている。もう一点、授業進行と直接関係はないが、少しでも子どもの世界に近づいたり、自発的に子どもへの興味関心を深めたり関わりやすくするために、一年次より授業前にいろいろな種類の絵本を紹介

をしている。以上の思いについてはご批評を仰ぎたい。

出席状態把握のための点呼は行わず、毎時、いろいろなコメントを書いて提出してもらっている。(内容は、感想、学習したこと、質問、意見、調査などその時の内容に応じて授業終了後に提出) これは、学生の授業の理解度や感想を聞き学生のものの捉え方・感じ方を把握して今後の授業の進め方の参考にしている。

### 3 受講生の状態

本講義の受講生は、保育学科2年生 85名、音楽科2年生 2名、計87名である。一般的にはまじめに静かに受講しているが、教育実習終了後の授業であるため現場の状況と絡めて事例から理論へ導き共感を得るようにしている。そんなときは「いるいる、そんな子いるよね」「あのときのことはそうだったのか」と実体験談に盛り上がることもある。

### 4 これまでの講義内容と本時の内容

#### 第1回 (10月5日)「オリエンテーション」

この授業への取り組み方や授業計画、レポートの課題やその提出法について説明。特に、後期始まってすぐ、教育実習で2回続けて休講となっているので、言語教材の作品とその使用法の説明を書いたもの、または、3・4・5歳児それぞれを対象にした絵本の読み聞かせの推薦書各2冊 計6冊の内容と推薦理由を書いたものどちらか一方を選択して11月30日までに提出。

「言葉と人間」 人間にとって言葉とはどのような意味を持つのか、人間が他の動物と区別する第1の要因に言語があげられ、情報を伝達したり交換するのに大切な道具であること。「狼に育てられた子」や「アヴェロン野生児」などの本を紹介しながら、ヘレンケラー女史の話など、言葉は人間が人間らしく生きるために大切なものであることを改めて考えてみた。

#### 第2回 (10月12日)「言葉の獲得・言葉の世界」

言葉の獲得は、生まれた直後から始まる母子相互作用を通して安定した親子関係が生じ、言葉以前のコミュニケーションから始まること。こうした親しい人(信頼のおける人)との触れ合いの中から発話されていく。また、言葉は時代によって変化していくものであり、その変化を受け入れていく柔軟性が大人に必要であること。

子どもの言葉の発達（まとめ）プリントにて説明。

外山滋比古著『わが子に伝える「絶対語感」』一頭のよい子に育てる日本語の話し方—を紹介 教養としてぜひ目を通してほしいから。

子育ての中の言葉に、「あやし歌」「遊ばせ歌」があり、意味がわからなくても言葉のやりとりを楽しみ、言葉のもつ音のおもしろさ、楽しさがコミュニケーションを豊かにする。子どもが日常の生活を子供らしく楽しく過ごすことが言葉を豊かにする。

谷川俊太郎ほか「ことばあそびの本」、川崎 洋「日本の遊び歌」紹介。

#### 第3回 (10月19日)「子どもの言葉の特徴」

一語発話、幼児語、幼児音ほか幼児期の言葉の特徴、自分なりの言葉、自分なりの意味、その子なりの表現があることに気づく。子どもならではの言葉や表現に出会った経験を思い出したり、話し合ったり。「ことばの中の子どもたち」「ちがうぼくととりかえて」朝日新聞の「あのね」などの事例を取り上げる。また、外国絵本、キンダーブックの復刻版紹介。

#### 第4回 (10月26日)「言葉を知ることの意味」

一語発話で話し始めた子どもが、少数の語彙を生活の中で繰り返し使うことによって、同じ一つの語彙でも場面によって違った意味内容をこめて使うことができる、という言葉というものの本質的な性格に気づいていく。大人が思う言葉の意味とはちがった形で使用することが多い。自分の知っている言葉を自分の経験で推しはかって表現したり、言葉を使うことそのものが楽しいという場もあり、そうしながら個々の使い方を学んでいく。

#### 第5回 (11月9日)「子どもの言葉の面白さ」

語彙の少ない子どもは、自分の少ない経験と知っている言葉で新しい経験を表そうとするために、大人からは想像もつかない表現となる。実感と言葉の結びつきの意外性や認識の違いからくる誤用、アニミズム的発想から、自己中心的発想から、正しい言葉の聞き違いからなどいろいろな要因で面白い（大人から見て）表現をする。その言葉の背景にある感情や思考、話したいという気持ちを受け止め、やり取りする時間を大切にすることが大人の務めである。

谷川俊太郎訳「かみさまへの手紙」参照。

第6回 (11月16日)『「聞く」ということ』

(ここでは子どもの話をおとなが聞くということについて考える。) 子どもは、自分のことを気にしてくれているという信頼関係があれば心を開いて話す。大人も子どもも「聞こうと思う」能動的な行為がないと聞こえない。子どもの声に耳を傾けるには、子どもに心を傾けなければならない。聞いてるふりをするだけでは、伝えたい心が伝わらないので次に話したいという人間関係も育たない。

第7回 (11月30日)『「話す」ということ』

まず挨拶から考えてみると、相手との親しみの度合いによって違うということ。(相手の心にどう響いているかということ)「聞く」というのと同様に、子どもの心はいつも動いていて、話したくなるというのは子どもが安心して気持ちを傾けられる人に話すのであって、保育者は、子どもが自分に向けた気持ちに寄り添ってあげることが大切。会話の内容を問題にするのではなく、今何をしようとしているのかを受け止める。また、言葉は相手に向かって話すのだから言葉のTPOの指導は大切である。

福音館書店「にほんご」参照(こくごの教科書にしたいような本)。

第8回 (12月7日)「子ども同士の会話」

子供同士の会話は、大人と違って取り留めのない話で盛り上がったり、ころころ変わるが、一緒にいて話しているだけで楽しかったり、お互いの話で触発され会話が弾んだりする。イメージの共有がうまくいくときはよいが、そこに違う価値観が混入するとややこしくなる。仲間意識が育つと、仲間以外のものには「ダメ」の言葉で自分たちのつながりを大切にしたり、相手に寄り添って言葉も選ぶようになる。

第9回 (12月14日)「言葉でかかわりのもちにくい子ども」

乳児、障害のある子、外国の人などいろいろな事情があるが、一人ひとりの個性を理解して、伝えたい気持ち、話したい気持ち、わかろうとする気持ちこれらを援助する。保育者は、その子どもとコミュニケーションを交わしたいという意欲や行動が大切。日本語の習得が保育の目標ではなくて、人とかかわる力や意欲を育てるということ、コミュニケーション能力を育てる援助や配慮が必要。子供同士のかかわりがうまく働かないときの代弁や援助、専門機関と

の連携や協力が必要なときもあるので、それぞれの地域の情報を得る手段を知っておく必要がある。ただし、重要な状況のとき、独断は避けるようにしないと保護者の不信を買うことがある。

第10回 (12月21日 本時)「ノンバーバルコミュニケーション」

言葉以外のコミュニケーションのことで、相手に何かを伝えたり、伝えようとしなくても伝わってしまうということがある。これらには、どのようなものがあり、保育者としてはそれらをどう受け止めていくのか考えてみる。読み取りのスキルを習得することは困難だと思われるが、非言語伝達にはいろいろなものがあることを理解し、関心を持ち続けることは大切だと思うので多少一般的な（幼児に限らないという意味で）ノンバーバルコミュニケーションにもふれてみたい。

〈今後の授業の予定〉

第11回 (1月11日の予定) 言葉をめぐる保育の考察

第12回 (1月18日の予定) 児童文化財と子どもの生活

第13回 (1月22日の予定・補講日)

「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」における言葉

第14回と第15回の2回分については、提出レポートをもってこれに替える。

本時の参考文献

- ・「世界20ヶ国 ノンバーバル事典（新装版）」金山 宣夫 研究社出版株式会社 1999.3
- ・「子どものボディ・ランゲージ」スザン・サース＋写真・文 東 淳一 訳 1987.9
- ・「ことばコンセプト事典」編集代表 渡部 昇一 第一法規出版株式会社 1993.2
- ・「日本語百科大事典」大修館書店

## 5 本時の指導案

|                                   |                                                                                                     |      |                      |
|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|------|----------------------|
| 保育内容一言葉                           | 保育学科 2 年85名<br>音 楽 科 2 年 2 名                                                                        | 第10回 | 2004, 12, 21（火） 4 校時 |
| 題 目                               | ノンバーバルコミュニケーション                                                                                     |      |                      |
| 目 標                               | 言葉以外の方法で会話を支えているものについての理解を深める<br>ノンバーバルコミュニケーションとは<br>どのようなものがあり、どう読み取りどのように表現するか                   |      |                      |
| 講 義 内 容 ・ 学 習 活 動 ・ 指 導 上 の 留 意 点 |                                                                                                     |      |                      |
| 14：40                             | 前回の調査結果について<br>今回の絵本紹介「アンジュール」<br>「鹿よ おれの兄弟よ」                                                       |      |                      |
| 14：50                             | 「ノンバーバルコミュニケーション」とは                                                                                 |      |                      |
| 15：00                             | 非言語伝達にはどのようなものがあるか<br>A、表すことと表れること<br>・ 顔 ・ 体 ・ 行動<br>B、記号的表現行動のひろがり<br>・ 視覚記号 ・ 聴覚記号 ・ 触覚記号 ・ 臭覚記号 |      |                      |
| 15：25                             | 伝えたいこと、伝わること                                                                                        |      |                      |
| 15：45                             | 大人からのノンバーバルコミュニケーション                                                                                |      |                      |
| 15：55                             | 子どものボディーランゲージ・手話                                                                                    |      |                      |
| 16：05                             | 出席カード記入（授業の感想・まとめ）                                                                                  |      |                      |

## 6 授業を終えての自己省察

### (1) 目標設定について

人は自分の意思を誰かに伝えるとき言葉だけでなくいろいろな方法で会話を成立させていることがある。それが言語能力も十分でない子どもの場合は特に注意しなければならない点も多い。子どもの気持ちをよく理解した上で子どもとのかかわりを進める保育者にとって十分心得ておかなければならない。

そこで、まず人はお互いの意思疎通を図るため大人も子どもも、また世界中人の中にいろいろなノンバーバルコミュニケーションがあることに気づいてもらい、大人と子どもの共通する問題として取り上げて考えてみることにした。

## (2) 授業全体の流れについて

毎回授業の始めにとりあげている前回の授業での調査やコメントについで回答をしたり、絵本に親しんでほしいために毎回何かの本を紹介しているが貴重な時間の中なのであせりはあるものの学生諸君には喜ばれ、いろいろな動機づけにはなっているので今回も文字のない絵本を取り上げた。

「ノンバーバルコミュニケーション」とはどのようなものをさし、どのようなものがあるのか教科書には書かれていないが一般的なことを少し丁寧に伝えたくて時間をとりすぎた点もあったことを反省している。したがってここの資料整理と提示法に工夫があればあればほどはや口で資料説明に走らなくてもよかったのではないかと思う。そのため一部の学生には本時だけでは理解が十分でなかったかもしれない。後で資料を見直してくれればよいことではあるが。さらに欲張って乳幼児のボディー・ランゲージや手話についても多くの写真を見せて考えてもらったり気づいたりしてほしくて走ってしまった。

さらに子どもの事例をとうしてノンバーバルコミュニケーションを検証するのに教科書にあるものと私（筆者）自身の体験からくるものと両方の説明したので少しくどくなった。

## (3) 資料の提示方法について

作成したプリント資料の文字が小さくて整備不十分な上に時間のこともあり急いだ説明でわかりにくい面があったのではないかと思う。写真や絵図の大きさをそろえてないため提示に手間がかかった。要するに提示法というより資料作成の仕方に問題があったといった方が正解だと思う。

## (4) 学生の理解度と自己活動の喚起

「教科書に書かれたことを理解して覚える」という受身の勉強をする習慣がなかなか取れない学生に何とかして自分で考えたり別の資料に当たってみようとする態度を育てたいと思い資料を用意したり、イメージしてみたり働きかけをしてみるが項目暗記型のほうが人气がよいのが残念である。

双方向学習の質問解答や話し合いの場を持つという形式のほうが自分のこととして受け止め吸収されやすいと思うが限られた時間と内容を消化しようとするといつ一方的になりがちである。悩みながら授業を続けている割には何時までたっても改良されてない点を大いに反省している。

## おわりに

多くの同僚に参観していただき、また終えてからの検討会には同僚はもとより、大学の学部が全く異なる先生のご参加・ご意見を頂戴して大変ありがたく有意義な研究会であったと思う。この場をお借りして貴重なご意見、ご感想、多くのご指導を頂いたことにつき心からお礼を申し上げます。

今回の研究授業を体験して日頃から懸念していた「学生の理解度アップと自発的な学習・研究にいたる動機付け」をどのように進めるのか自分の課題として研究しなければならないと強く感じさせられた。

- \* 以下の資料は授業日にプリント資料として配布したものである。提示写真や絵図については省略。
- \* 出典は本時の参考文献の中から引用したものである。

## 非言語伝達

意思や情報を伝達する最大の手段は言語であるが、言語以外にも、伝達の手段があるので、以下に概観する。

### A. 表わすことと表われること

ことばは、概して、言おうと思って言うものだが、そのことばでも、つい、思わず口に出てしまうということがある。ことばによらない表現には、表わそうとする意志を超えて表われてしまうことがかなり多く、表わしたのか表われたのか区別がつかないこともある。顔による表情などは、「表わす」よりも「表われる」のが根本の性格であるが、「不快の感情を顔に表わす」というように、それをも表わすことだと解釈できるし、また、実際、意図して顔つきに態度を表わすことも多いのである。

表わすのか表われるのか明確に区別はできないが、結果的に伝達の役割を果たす類の表現形式を、顔・体・行動の三面で捉えてみる。

#### (1) 顔による情意表現

顔には、その変化相として、顔色とか顔つきとかいうものがある。顔色は、本来、生理的なものであって、健康ならば顔色がよく、不健康ならば顔色がわるいのだが、顔色は、また、心理の投影でもあるから、生理的には健康でも、「顔色がさえない」ということがある。また「顔色をうかがう」という言い方があるのは、あることに関する快不快が顔色に表われると思うからである。

顔つきとなると、ずっと細かく本人が操作できるものと考えられる。「何くわぬ顔」「素知らぬ顔」「迷惑顔」「渋い顔」「得意顔」「えびす顔」「不満顔」など、意図性の大小はさまざまだが、いずれも端的に自己表現を顔でするすがたで、顔つきの諸相である。

顔つきを作る道具は、顔にそなわる諸造作で、それには、額と眉・目・鼻・口・頬・あごなどがある。

額が広々としているのは、さわやかな感じで、額にしわを寄せるとか眉で八の字をかくとかいうのは、心にわだかまりがあることを表わしている。

目を普通より大きく開くことは、相手への威嚇や、驚きのような異常感情を表わす。しかし、「涼しい目を大きく見開く」というようなこともあって、開け方に何らかの不自然さ

が伴うか否かが境目であろう。目の内部操作で、青眼・白眼ということがある。白眼で見るというのは、ふつうにはできないことで、敢てやれば大変異常なこととなる。「白眼視」とは比喩的なことばであるが、ある人を、横合いや陰からは見ようとするが、まともに目を合わせようとしらないのは、白眼視に入る。視線の処置は、目による表現の大きな部分を占める。

不満は口の形に表われると言われる。口をとがらすのは、その時の不満の表われ、唇が反り加減になるのは、ふだんからの不平不満の積み重なるの表われだという。ふくれっ面というのが本当に頬のふくらみによるものなのかどうかかわからないが、口のしまりが自然でないことから来る表情の一つであろう。

笑いは、顔の表情を作る非常に大きな要素であり、主として顔の下半分でする動作であるが、もちろん、目も笑うのである。「目で笑う」とか、反対に「顔は笑っているが、目が笑っていない」とかいう言い方があるのは、目が心の窓で、笑いのいちばん内面性をつかさどると考えられるからだろう。

慢心と鼻とは、縁が深いことになっている。これは、鼻が顔の上下の向きを代表するからに違いない。心が増長すると顔が上を向き、心がしなえると顔が下を向くのは自然の勢いである。天狗は元来鼻が高かったわけではあるまい。慢心の悪徳を身に負わされたために、逆に、鼻が高いことになって行ったものと思われる。

顔は、右左にも向けることができる。顔をそむけるとか、そっぽを向くとかは、きわめて意図的な拒否表示になる。

#### (2) 体による情意表現

背骨の伸び加減と胸・肩の張り加減で、姿勢というものが作られる。前こごみになるのは姿勢がわるいこと、まっすぐ立ってやや後へ反り加減になり、顔は上を向かないのが、姿勢のいいことである。「がっくり肩を落す」のは失意落胆のさま、胸を張るのは得意高揚のさまである。「肩で風を切る」「手を振って歩く」は、得意さで他を圧倒しようとする積極的な表現行動である。

人の後姿というものは、本人が全く知らないうちに、その人の心の抑揚を表わすものである。「後姿がさびしい」というのは、決して本人の表現意図によるものではない。

#### (3) 行動による意思表現

無遅刻無欠席ということは、そのことだけでは、働きの内容とは関係のないもので、能力のいかんにかかわらず、やろうと思えば、だれでもできることである。それで、やる気とか誠意とかいうものを表わすには、これは

便利な手段である。このように、何かを表わすために、ある行動をするということがある。

会合への出席・欠席ということは、元来は、ただ、その会合に出るか出ないかということだけのことである。自分が勉強したくてある講習会に出席するという場合は、出席することによって知識を得るか、欠席することによって知識を得そこなうか、ただそれだけのことに帰する。

しかし、ある人の何かの祝賀会に出席するか欠席するかとなると、そう簡単なことはできない。欠席すると、祝賀の意を表しないことになってしまう。祝意はあるのに、他の用事でどうしても行けないことがある。そのときは、会費とか、その中に含まれている記念品代とかいうものを払い込んで、体は参加できないが祝意は表するという態度を表わすのである。

子供が家出をするのにも、2通りあろう。どうにも家にいたくなくて出るのは、行動そのものであるが、親への反抗を行動で示したくて出るというのは表現行動である。さらに、親にさほど反抗したくなくても、友人たちに自分もいっばし反社会的行動ができるのだということを示すために、簡単にできる家出を選ぶというような身代わりの表現行動になっている場合もあろう。

酒を飲むとか食事をするとかいうことは、自分が身一つでする場合には、それ自身の行動でしかないが、他人に酒食を供しつつ自分も参加するとか、他人から供された酒食を飲み食いするとかの場合には、飲み食いそのものよりも、その背後にある意味が大事になる。他に供する場合には、どんな酒、どんな食べものを、どのくらい供するか、どんな場所、どんな席、どんな器で用意するかといったことが、非常に大事なことになる。それによって表わす意味が違って来るからである。人のごちそうになる場合には、少々口に合わぬものでも、無理してうまそうに食べなくてはならないし、食べ方も、愉快そうに食べなくてははいけない。この種の食事は、食事やその設け方によって先方が表わそうとしている意味を理解し、こちらもまた、飲み方食べ方によって、先方の意味を理解したことや、参加した自分の意思を表わすことが、そのすべてなのである。

## B. 記号的表現行動のひろがり

記号を用いて、組織的に、情報や意思を表わし伝えることができる。言語こそが、そういう記号組織の最大最高最精妙なものであるが、言語以外にも、広く、表現・伝達のための記号組織ができています。

記号には、記号作りの文法がある。

### (1) 媒体による記号の種類

記号は人間に理解されなければならない。理解されるためには、認知されなくてはならない。従って、人間にそなわる 5種類の感覚が記号の媒体となる。

### (2) 視覚記号

見てわかる記号で、形と色と光とが、それぞれの単独でか、互いの組み合わせかで用いられる。道路標識や家々の紋、都市や企業体のシンボルマークなどが、その典型的なものである。これらは、平面造形だが、江戸時代の商店が、その店で売る品物を大きくした模型を軒先におろ下げて広告としたなどは、立体造形を記号に用いたのである。

一般に色の識別は、直感的で、図形を認識して判断するよりも早いから、危険を避けるための交通信号は、最も識別しやすい赤・黄・青の三原色を光にして交互に示すことになっている。

### (3) 聴覚記号

聞いてわかる記号で、せきばらいが人の存在を知らせる記号になるようなものである。せきばらいは、発声器官によって音を出す、拍手は両手のひらを打ち合わせて音を出す。足で床を踏みならすのは、体の一部である足を身外の物質である床に打ちつけて音を出し、記号とするのである。

中国人の好きな爆竹は、爆竹音の急激な連続によって、景気よく祝意を表わすものである。モールス信号は、長さの違う音の組み合わせで模様を作り、ことば用の音を表わすもの。

受信者は、それをことばとして受け取るのだから、これは非言語記号ではないが、言語記号の記号作りに非言語記号が動員されているのである。

#### (4) 触覚記号

相手の人の体にさわることは、慣れ慣れしいことだから、握手・抱擁・接吻のように、親愛や愛情を表わすための記号として使われるのが一般的な形である。叩くとかつねるとか、相手が受け入れがたく感じるさわりかたは、一般的な記号としては成立しがたい。悪を悪と知らせるために苦痛を与えて罰とするのは、知らせる手段としてきわめて有力なものではあるが、これは記号として知らせるのとは別のことである。

#### (5) 嗅覚記号

においで何かを知らせるということも、なかなかむずかしい。においは分節しがたいものだから、それを細かい単位に切ってさまざまな組み合わせを作るというようなことができない。その代わり、いいにおいは人を引きつける力があり、いやなおいは、人を遠ざける力があるので、遠ざける方を利用して、有毒ガスには悪臭をつけることが行なわれている。これが、においの記号的利用の最たるもので、他の例は、なかなか思い浮かばない。

香を炊くとか、香水を衣服にふきかけるとかは、人によい感じを与えようとするものではあるが、それが記号的に何かを表わすとは考えがたい。無理に言えば、上品さとか魅力源とかを雰囲気的に表わすのである。

コーヒーのかおりや味噌汁のにおいで朝食を思ふのは、受ける方が生活習慣からそう連想するようになっているので、発する方でそれを表わしているわけではない。

#### (6) 味覚記号

これも、記号組織として成立しがたい。体に入って毒になるようなものは、口に入れたときに、よくない味がして、たいていは、すぐにわかる。これは、自然の信号と言うべきものだが、発する側に人間の意志がないので、記号とは言えない。

#### (7) 記号化の様式

指で丸を作って金銭を表わすように、現物の形をまねて作る記号は模写記号、抽象的で形のないものを、何かの連想から具体物の形にして表わす記号、たとえば、愛情をハートで表わすようなものを象徴記号という。自然には何の対応もないものを、 $x$ が $a$ を表わすというように、ある集団の中で決めて使えば、これが最も大きな記号組織を作る手段となる。この種のものを約束記号と言おう。言語は自然にできた約束記号の極致である。

#### ●【日英対照】身体の記号(1)

日本人のジェスチャーと英米人のジェスチャーで対照的なものをいくつか挙げてみよう。

- 1) 手招きをするとき、日本人は掌を下に、英米人は上に向けてする。
- 2) 自分を指すとき、日本人は人差し指で鼻を指し、英米人は親指または手で胸を指す。
- 3) 肩をすくめるのは、英米人は「知りません」「仕方がないね」「困ったものだ」といったニュアンス。日本人のは「しまった」「申しわけない」「こわい、こわい」といったニュアンス。



#### ●【日英対照】身体の記号(2)

- 4) 「お金」の意味では、日本人は親指と人差し指で丸を作り、英米人は親指と人差し指、中指をこすり合わせる。
- 5) 頭をかくのは、日本人は、ほめられて照れたり、「すみません」とわびるしぐさ。英米人は、考えこんだり、考えあぐねているときのしぐさ。
- 6) 人の前を通るとき、手刀を切るようにするのは、日本人独特のジェスチャー。
- 7) 「とんでもない」「違う違う」という意味で、顔の前で手を振るのも日本的ジェスチャーである。



# 高 松 大 学 紀 要

第 45 号

平成18年 3 月25日 印刷

平成18年 3 月28日 発行

**編集発行**

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841-3255

FAX (087) 841-3064

**印 刷**

株式会社 美巧社

高松市多賀町 1 - 8 - 10

TEL (087) 833-5811